

偶のなわに 休止小

一般社団法人関西BNCT医療センター長を務める
大阪医大の黒岩敏彦教授（脳神経外科学）



000平方メートル。大阪医大だけでなく、他の大学や病院、機関が共同で利用し研究を進める。

◇ 関西でのBNCTセンター構想は、できるべくしてできた。そう話すのは、一般社団法人関西BNCT医療センター長に就任した黒岩敏彦・大阪医大教授（脳神経外科学）だ。

BNCTの研究は、1950年代に米国で始まったが、うまく進んでこなかった。「それを改良してきたのが日本。適切な中性子線を出せる世界

がん新治療拠点大阪に

日本人の2人に1人がかかり、3人に1人が死亡するといわれる「がん」。警戒するべきではあるが、検査法や治療法が進み、今や早期に発見・治療すれば「治せる病気」だ。

ただやっかいなのは、がん細胞が変異した自分の細胞であること。がんを攻撃して治療しようとする、正常な細胞もダメージを受けてしまう。

◇ がんの新しい治療の研究拠点として、大阪医大（高槻市）の敷地内で「関西BNCT医療センター」（仮称）の建設が進ん

BNCT(ホウ素中性子捕捉療法)

たと核分裂を起こすホウ素をがん細胞に取り込ませておく。そして外部から低いエネルギーの中性子線をあててホウ素を



関西BNCT医療センター（仮称）の完成予想図。関西BNCT医療センター提供

を与えず、がんだけを選択的に攻撃できるという。京都大原子炉実験所（熊取町）でも臨床研究が行われ、大阪医大もかわってきた。

がん治療には、手術▽放射線療法▽化学療法――の主に三つがある。通常の放射線療法では、線量限度いっぱいまで照射すると再発した場合に追加照射できないが、BNCTなら再発したがんでも治療可能。放射線療法に加わる「次世代の治療法」として期待されるといふ。

建設中の施設は地上3階、地下1階で延べ約4

【関野正】

19年の予定だ。

黒岩さんは「BNCTは発展途上。ホウ素製剤の改良が進めば、さらに効果が高まる」と大阪・高槻から、新治療の情報が発信されていくのを期待する。診療開始は20